F-3

Typo, thinko, scanno：エラーを表す-o の記述

萩澤大輝 (神戸市外国語大学 大学院)

1. はじめに

現代英語の主にインターネット上の文章において-o のついた新語が観察される。これを本発表は「エラーを表す-o」と呼び、特徴づけを試みる。(1) に示したのは Amazon カスタマーレビューに見られた文章である。

(1) The content is enthralling. However, there are numerous instances of the word “time” being wrongly used for “the”; this situation becomes increasingly annoying with each additional instance. There are also many other errors which may be **scannos**. Proofreading is needed.
内容は面白いです。ただ、time という語が誤って the のかわりに使われているケースがたくさんあり、この取り違えに出くわすたびイライラがつのります。他にもミスが多く、おそらくスキャンの不具合による誤字でしょう。校正した方がいいです。
(https://www.amazon.com/gp/customer-reviews/R30HZ4Y3Y2NEWH?ASIN=1375892916)

2. 通時的な経緯

連結母音-o-をもつ語に対して-o-の後ろを切り取るタイプの省略が盛んに行われた時期が存在する。*Oxford English Dictionary* による初出年を添えて下に例を示す。

(2) hypo (<hypochondria, 1701)　　memo (<memorandum, 1705)
compo (<composition, 1823)　　photo (<photograph, 1860)

この流れのなかで typo が登場するが、本発表に関わる (3b) がどう成立したかを考えると typographical error という句の省略は (2) を見る限り想定しづらい。すでに慣習化していた typo という形式を流用し、そこに誤植の意味を持たせたと考えると無理がない。

(3) a. [Printers] will confer a favour on a brother **typo** [etc.]. (<typographer, 1816)
b. My men .. don’t like to pass anything till it’s free from **typos**. (<typographical error, 1892)

typo に分析的な意識が働くと「エラー」という意味が-o に割り振られる。そしてその-o が語形成に活用されるようになった。このように、語の一部が再分析されて語形成に参与するようになる現象はセクリーション (secretion) として知られる (Jespersen 1922, Callies 2016)。エラーを表す-o が語形成に活用されるようになったことの動機づけには、省略のマーカー (combo < combination) や指小辞 (dumbo < dumb) など慣習的な-o による語形成パターンの存在が挙げられる。

3. 先行研究

意味記述、形式面での制約、新語解釈を可能にする認知的な仕組みという 3 点に着目して先行研究を概観する。

3.1 López Rúa (2007)

インターネット上のジャーゴンを調査した研究のなかで scanno と mouso という語を挙げ、語末の-o が typo に由来すること、「エラー」という軽蔑的な (pejorative) 意味を表すことを指摘している (López Rúa 2007: 149)。

意味記述については-o を「エラー」とするほか、mouso (<mouse) を挙げていることから主要な意味が行為ではない語も語基になりうることが分かる。この点は後で検討する。形式面での制約、解釈の認知的な仕組みについては言及がない。

3.2 Bauer et al. (2013)

破片辞 (splinter) を議論するなかでエラーを表す-o も取り扱っている。この破片辞とは "[O]riginally (mostly) non-morphemic portions of a word that have been split off and used in the formation of new words with a specific new meaning."として定義される (Bauer et al. 2013: 525)。前節で紹介したセクリーションの結果として取り出される要素が破片辞である。いくつか例をあげる。-o のタイプ数がきわめて少ない点に注目されたい。

表 1：Bauer et al. (2013: 526-528) に基づく破片辞の例

破片辞 (< モデル語)	意味	具体例	タイプ数
-ati (<literati)	エリート	jazzerati, Twitterati	10
-burger (<hamburger)	バーガー	fishburger, tofuburger	18
-delic (<psychedelic)	サイケな	folkadelic, sample-delic	10
-holic (<alcoholic)	~中毒者	chocoholic, yogaholic	11
-tarian (<vegetarian)	~食主義者	eggitarian, fruitarian	7
-licious (<delicious)	魅力的	diva-licious, pig-a-licious	11
-matic (<automatic)	自動	dripomatic, vete-o-matic	12
-o (<typo)	**言語産出エラー**	**typo, speako**	**2**
-scape (<landscape)	~の景色	cityscape, soundscape	15
-tainment (<entertainment)	娯楽	edutainment, kid-ertainment	22

-o の意味記述は「言語産出エラー」とかなり特定的である。挙例の typo と speako に限っては当てはまるものの、どこまで妥当かは検討の余地がある。形式面での制約は言及がないが新語解釈の認知的仕組みについては「破片辞による新語はかなり奇抜で、注目も引きやすい」という見解を示したのち、次の内省報告を行っている。

(4) Such a view seems justified on psycholinguistic grounds since the online recognition and interpretation of pertinent forms seems to require more processing effort than simple lexical access to a memorized form would. (Bauer et al. 2013: 529)

記憶されている形式に比べると処理労力がかかるように思われるという報告は貴重である。ただし、認知的な処理の内実に深く立ち入った議論はしていない。

4. 実例の観察

確認できている限りでは次のような語がある。網羅性や代表性はないが、少なくとも先行研究の報告よりも多くの語が存在することは指摘できる。

(5) a. clicko, hearo, reado, scanno, spello, tappo, thinko, writo
b. ?braino, ?mouso, ?penno (例僅少); ??conceivo, ??understando (臨時語)

以下、試訳とともに実例をあげる。最終確認日はすべて 2018 年 10 月 9 日である。

(6) In similar situations online, I count to ten to allow the opponent a chance to undo, since it could conceivably be a **clicko**. Even if it is a **thinko**, I would be happy to grant an undo in such a situation, since it would make for a more satisfying game.
ネット囲碁で相手が急に悪手を打つことがあれば、10 まで数えて相手に待ったをするチャンスをあげています。クリックミスかもしれないし。ポカだったとしても、喜んで待ったを認めますね、そういう場合。その方がやりがいのある対局になりますから。
(https://senseis.xmp.net/?GoAndEthics)

(7) A: But just what ‘rukes’ do you think there are for commercials?
B: What do you mean “rukes”? I think you made a **reado**.
A: でも CM にどんなルークがあると考えてるの?
B: 何の話? ルークって。[ルールを] 空目したんじゃない。
(https://boards.straightdope.com/sdmb/archive/index.php/t-523264.html)

(8) This machine is a master of **speakos** and mondegreens. […] my tablet has changed [...] “I truly couldn’t see” to “a cruelly good emcee.”
この装置は発話の誤認識や解析間違いの天才です。[...] 私のタブレットは [...]「本当に見えなかった」を「残酷なほど上手い司会」に変換したんですよ。
(https://www.nytimes.com/2007/01/07/books/review/Powers2.t.html)

(9) Gruber's speeches are incredibly consistent in content and structure. No **speakos**.
グルーバーのスピーチは内容も構成も驚くほど一貫性がある。言い間違いなし。
(https://twitter.com/kerpen/status/493150048012627968)

(10) I will seriously die if I have to hand this in. I've done so much **writos** and so much shorthand she wouldn't even understand it.
これ提出だったら本気で死ぬ。書き間違いも省略も多すぎ、まず理解ができないと思う。
(https://twitter.com/thxlonius/status/85097590189850625)

(11) "Another thing coming" was originally a **hearo**, and there can be no dispute about that[.]
[another think coming (と思ったら大間違いだ) というフレーズで think ではなく thing が使用されることに関して] 元をたどれば "Another thing coming" は聞き間違いだった。そこに議論の余地はない。
(https://groups.google.com/forum/#!msg/alt.usage.english/_UT6Nzp_ONA/iqrI-82yOs4J)

3 点指摘しておく。まず、原理的には PC と独立に生じうる行為でも reado や speako などは用例を見ると PC との関連が多く見受けられる。2 つ目に、漠然性も確認される。例えば speako は人間が犯す言い誤りでも機械が犯す発話の誤認識でも用例がある。これは慣習的でない NN 複合語などで典型的に観察される状況である。3 つ目に、主要な意味が行為ではない mouse などを語基とする例は (メタ言語的な使用を除けば) ほぼ例がない。

まとめると先行研究の特徴づけは過剰生成・過少生成を招くといえる。López Rúa (2007) のように「-o はエラーを表す」というだけでは conceive や understand などに-o が付く予測を妨げないが、実際には極めて周辺的である。意味の似た接辞 mis-であれば付加できるため形式面での制約も考察が必要である。また Bauer et al (2013) のように「言語産出エラー」と規定すると clicko などは容認されないという誤った予測をしてしまう。

5. 本発表の提案

まず、-o による新語の成立が、モデルとなる定着事例 typo と性質を共有していることに依存していることを示す。意味的な性質と形式的な性質を順に論じる。続いて-o による新語解釈の認知的な仕組みを考察する。

5.1 意味記述

-o それ自体の意味はエラーないし不作為と記述できるが、語基と-o が合わさった全体が持つ意味も考慮する必要がある。まずは typo が備える意味要素を (a) PC 関連、(b) 言語、(c) 産出と分類する。これに照らすと、-o による新語の意味要素として (a)～(c) のいずれも必須とは言えないが、どれか 1 つは必ず typo と共有していることが分かる。

表 2：語全体が持つ意味要素

	PC 関連	言語	産出
typo	○	○	○
clicko	○	x	x
reado	?	○	x
writo	x	○	○

同様に、語基の意味についても (a) 行為、(b) 人間、(c) 意図的という分類を行う。typo の語基を type と考えると、これらをすべて満たしている。新語の語基の性質をみると、再び typo を中心としたカテゴリーをなしている。道具などが語基になるケースの用例が非常に少ない理由は (a) ~ (c) のいずれも完全には満たさないことに帰せられる。

表 3：語基の持つ意味要素

	行為	人間	意図的
typo	○	○	○
hearo	○	○	x
scanno	○	x	x
mouso	?	?	?

5.2 形式的な制約

-o による新語は形式の面でも typo との共通性が求められる。まず 1 つ目、エラーを表す -o は語末にしか生起しない (^{OK}clicko, *oclick)。語頭での用例は見当たらず、自立もしない。この点では接辞-y と似るが (^{OK}apricoty, *yapricot; Langacker 1987: 73)、相違点もある。-y は事例が非常に多いため [[N]-y] のような安定した抽象的スキーマが想定できる。一方-o は事例が限られるため、具体的な [typo] をモデルとして参照する、いわゆる「アナロジーによる語形成」と見られる。

2 つ目、基本的に語基は一音節に限られる。対比の文脈であれば、例外的に複数音節語に -o の付く例はあるが、臨時語であるため典型例の特徴づけへの反例にはならない。

(12) He moved on to discuss errors beyond the **typo—**the **speako**, the **writo**, and ultimately the **conceivo**[.]
(https://groups.google.com/forum/#!original/bit.listserv.mbu-l/V7NM5QZKaf4/UCNHL-CnpOYJ)

これらの意味的・形式的な性質を考慮すると大幅な過剰生成・過少生成は解消される。typo と新語とに圧倒的な頻度差があることからも、typo をモデルとした語形成が行われるのは自然といえる。

5.3　新語解釈の仕組み

なじみのない-o による新語を提示された場合､形式から意味が即座に喚起されないため、その新語のモデル typo を経由して解釈する必要がある。では、-o という部分的な手がかりから typo にたどり着くまでに、どのような認知の仕組みが関与するだろうか。

まず、結果から原因にさかのぼる推論、アブダクションが挙げられる。省略された結果の形式から省略前の形式を推論するわけである。また、-o による新語は口頭で使われにくい打ち言葉的な性格があるため、視覚的な仕組みも働くだろう。考えられるのは知覚的補完、特に実際には見えていない部分を補って知覚するアモーダル補完である (cf. 行場 2014)。これは f**k が部分的に遮蔽された連続する文字列に見えるなどのように、言語・非言語を問わず見られるものである。本発表に即して言うと clicko などの背後に typo が補完されて感じられるということになる。

しかし候補は他にも piano、tomato、zero など大量にある。こうした候補の中から typo を選べるとすればなぜだろうか。要因として文脈的なプライミングがありうる。例えば PC やミスなどの先行文脈は typo の想起を促し、他の候補語を抑制すると思われる。

6.　まとめと展望

本発表は (i) 先行研究より観察の範囲を広げ、(ii) 大幅な過剰生成・過少生成が生じない記述を提示し、(iii) 新語解釈の認知的仕組みを示唆した。本発表の内容を敷衍すると、従来個別に扱われてきた語形成パターンが統一的に説明できる可能性がある。

(13)	a	混成	-og: {**smog**}	唯一の慣習語、新規事例なし
	b.	破片辞	-o: {**typo**, clicko, ..., scanno}	唯一の慣習語、新規事例は少数
	c.	派生	-y: {**salty**, **spicy**, ..., apricoty, ...}	大量の慣習語、新規事例は無数

参考文献

Bauer Laurie, Lieber Rochelle, Plag Ingo (2013) *The Oxford reference guide to English morphology*. Oxford: Oxford University Press.

Callies Marcus (2016) Of soundscapes, takathons and shopaholics: On the status of a new type of formative in English (and beyond). *Language Typology and Universals*, 459-516.

Jespersen, Otto (1922) *Language: Its nature, development and origin*. London: George Allen and Unwin.

Langacker, Ronald (1987) *Foundations of cognitive grammar, vol 1: Theoretical prerequisites.* Stanford: Stanford University Press.

López Rúa, Paula (2007) Keeping up with the times: Lexical creativity in electronic communication. In: Judith Munat (ed.) *Lexical creativity, texts and contexts*, 137-162. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamin.

行場次朗 (2014)「形態の知覚」下山晴彦 (編)『誠信心理学事典 新版』161-164. 東京：誠信書房.